

P2-85 当科における婦人科肉腫・癌肉腫に関する臨床的検討順天堂大¹, 賛育会病院²加塚有紀¹, 金田容秀¹, 須賀 新¹, 木村美葵¹, 鈴木千賀子¹, 宮井健太郎¹, 國井優衣子¹, 宮国泰香¹, 山田由季¹, 寺尾泰久¹, 荻島大貴¹, 武内裕之¹

【目的】婦人科肉腫・癌肉腫は早期発見が困難なうえ、治療抵抗性の為極めて予後不良の疾患である。過去10年間当科で経験した症例の治療成績および予後について報告する。【方法】25症例(子宮原発13例, 卵巣原発10例, その他2例)について後方視的に臨床検討。年齢は26—67歳(平均49歳)。進行期分類は1期:8例, 2期:2例, 3期:9例, 4期:6例。病理組織型は平滑筋肉腫:11例, 子宮内膜間質肉腫:2例, 癌肉腫:12例。【成績】子宮原発の6例は不正出血, 4例は下腹部痛を主訴とし, 術前細胞診・組織診の陽性例は7例。卵巣原発症例はすべて卵巣癌の術前診断で手術施行。手術術式は試験開腹2例, 腫瘍減量手術1例, 単純子宮全摘術・両側付属器切除術施行22例, 骨盤内リンパ節郭清16例, 傍大動脈リンパ節郭清施行5例。初回手術時12例で残存病変を認め, その11例に対して術後多剤併用化学療法施行, 奏効率18%(CR+PR2例, NC1例, PD8例)でCR症例の生存期間中央値(MST):56M, PD症例MST:7M。経過観察した1例の生存期間11M。一方残存病変を認めない症例13例では, 術後補助化学療法群10例の奏効率70%(CR+PR8例(MST:58M), PD2例(MST:11M)), 観察群3例MST:56M。現在生存例はoptimal surgery完遂例及び再発・再燃を認めない症例がほとんどを占める。化学療法に抵抗性を示す症例が多いが, 外科的治療に加え化学療法併用することで予後良好な症例も経験した。【結論】肉腫・癌肉腫は有効な治療法が確立されていない為, 術後腫瘍残存した場合の長期生存はあまり期待できないのが現状である。まずは第一選択の外科的治療が長期予後に寄与すると考えられるが, 今後は更に術後補助化学療法を駆使した集学的治療の検討も必要である。

P2-86 子宮体部癌肉腫 Carcinosarcoma. 64症例の臨床的検討

癌研有明病院

田中都生, 藤原 潔, 竹島信宏, 平井康夫, 宇津木久仁子, 杉山裕子, 馬屋原健司, 川又靖貴, 滝澤 憲, 荷見勝彦

【目的】子宮体部癌肉腫(Carcinosarcoma.)における当院での治療経過, 長期予後について検討した。(方法)対象は1991—2005年に当院にてCarcinosarcoma. と診断された64症例。平均年齢は60.81歳(27—87), 臨床進行期は, Ia期1例, Ib期12例, Ic期12例, IIb期1例, IIIa期9例, IIIc期20例, IVa期4例, IVb期5例であった。治療は手術療法を基本とし(PALN廓清まで44例, PLN廓清まで9例, リンパ節廓清なし11例), adjuvant chemotherapyを49例(76.5%)に施行した。(成績)進行期別5年生存率は, Ia, Ib期100%, Ic期60.61%, IIIa期23.33%, IIIc期50.33%であった。この結果よりさらに, IIIc期20例中播腫病変のない12例(リンパ節転移陽性例)とIIIa期9例(骨盤内播腫病変あり)のsurvivalおよびdisease free survivalについて検討したが両群に有意差は認めなかった。(結論)子宮体部Carcinosarcoma. の当院での臨床成績を検討し上記結果が得られた。今後, 子宮体癌(Endometrioid adenocarcinoma.)との治療成績比較検討する予定である。

P2-87 当センターにおける子宮体部癌肉腫に関する臨床的検討

千葉県がんセンター

鈴鹿清美, 加藤一喜, 大崎達也, 田中尚武

【目的】子宮体部癌肉腫は子宮体癌に比べ, 頻度は少ないものの予後不良である。その臨床的性格を明らかにし, 最適な治療法を確立するため, 当センターにおける子宮体部癌肉腫症例の臨床病理学的検討を行った。【方法】1997年から2006年までの9年間に当センターにおける子宮体部悪性腫瘍は229例, そのうち子宮体部癌肉腫は16例である。16例に対しその臨床的背景, 治療法, 予後因子について検討した。【成績】1, 16例の年齢中央値は63歳(55—77歳), 生存中央値は13ヶ月である。2, I期6例, II期1例, III期5例, IV期4例で, 組織型はheterologous6例, homologous8例, 未分類2例であった。3, リンパ節転移は12例中5例(42%), 脈管侵襲15例中9例(60%), 筋層浸潤1/2以下5例, 1/2以上10例であった。期別分類, 病理組織型, 筋層浸潤, 脈管侵襲, 頸部浸潤, リンパ切転移, 付属器転移の有無において, cox比例ハザードモデルを用いた多変量解析にて筋層浸潤が予後因子として有意に抽出された($p=0.039$)。4, 再発部位は腹腔内3例, 腔断端2例, 脳転移1例, 不明1例で, 化学療法を施行した14例は全例アンスラサイクリン系を含むレジメンにておこなわれている。【結論】子宮体部癌肉腫は予後不良で, 類内膜腺癌に比べ, リンパ節転移, 脈管侵襲の頻度が高い。有効な補助療法開発のためのRCTが望まれる。